新由縁 離廼遊佐

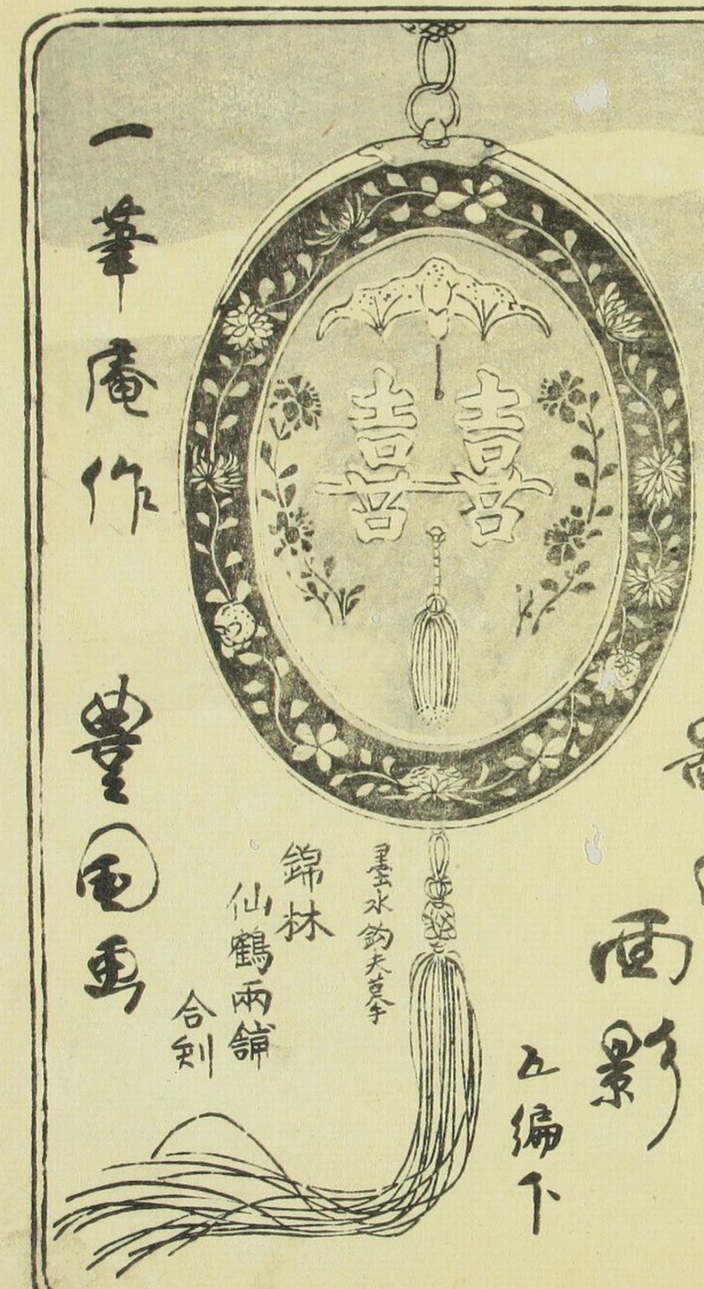
五編
六編

筆 魔主人作
陽画 豊国画

森永三年 嵐右
彫摩 嘉助

八八金亀

己酉新彫



一筆庵作

豊国画

墨水釣夫写

錦林
仙鶴兩舗
合刻

部の画影

五編下

己酉
規春

一筆庵
歌合
五編
上冊

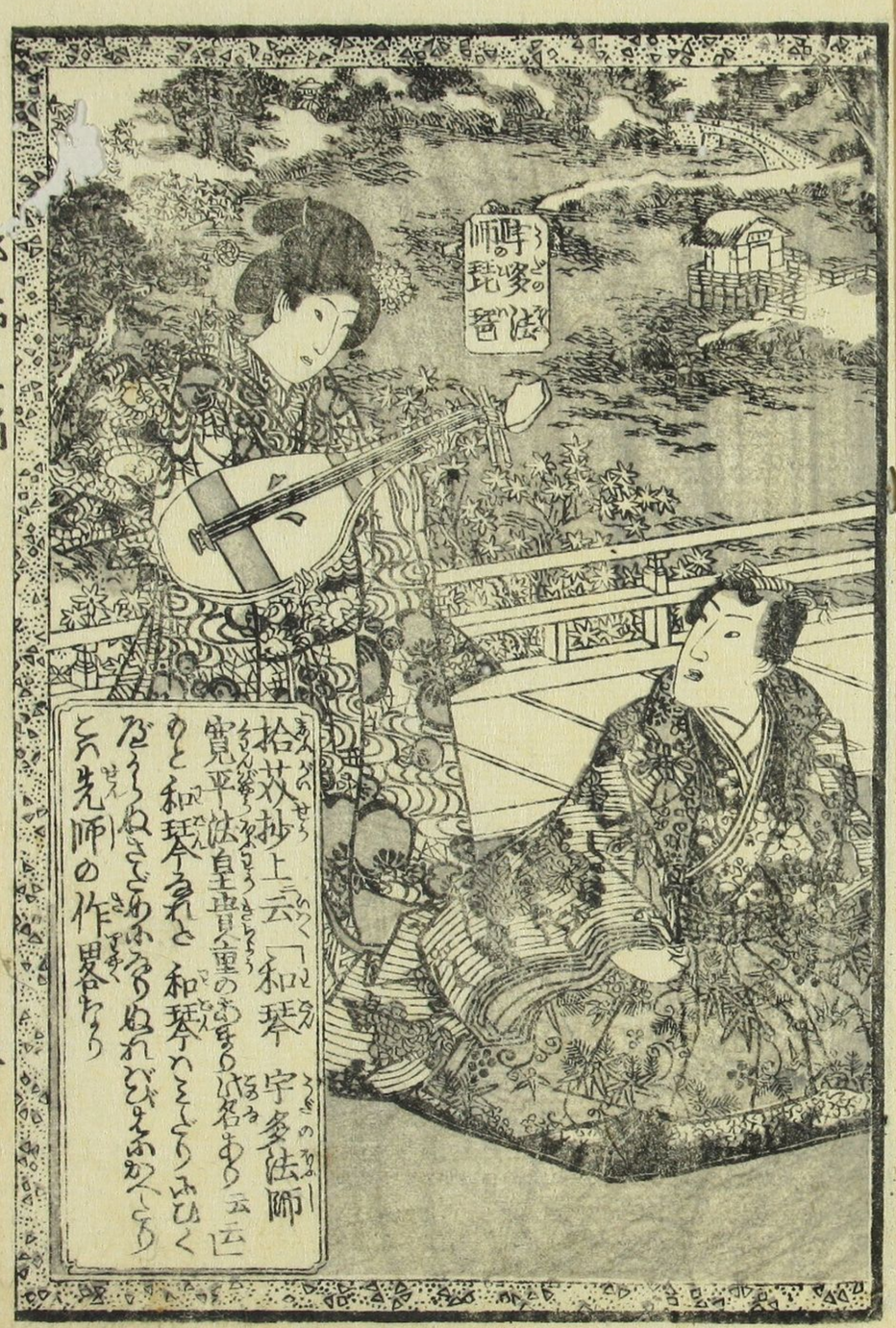
豊国画

錦林仙鶴二書房梓

竹取空穂伊勢大和諸の物語皆往昔の讀本ゆゑ更にもいふかくも書るまゝ私ど今のごとく際々しく人名のりなど年號月日細密ゆゑ記されが男も女も百官名源氏うんぬん惟光良清其外男人名知まじき加之昔の俗語も今より見れば雅文ゆゑ耳遠く注を讀ても十が七八朧月夜か梅が香るあく物ぐの對面めく分解をもて不會得ゆゑ我執ぐわん評さるゝ事かくかれが長の年月の間でゞ何処で歳が首書うるまれぬ年表なき文昔より錯〳〵人の年齢など勘定の合ぬ所が思ひのたるも有とて見過て改ろ所が悪ひがめたるも面伏ながら朱雀院か擬へ義尚公を三四編か當時の武將と記々濱菅丞相ふぢ原義植公かありけるとふと義尚とうつゝにもまぎれ極樂寺の法會ゆゑが小銭の一周忌とせーとか三回忌とあやまり給へ義裏義栄の遺を拾ひ次編か弥上の若井兼房ゆゑ真木柱か説脱せるを補ひ例の狂言ぶりをか加へ藤裏葉の巻ど土の鳥のトンく拍子か智慧の仕業の底をたゝき初春の油應ゑと共か松の内より販ひ出すべし

嘉永二年酉新刊

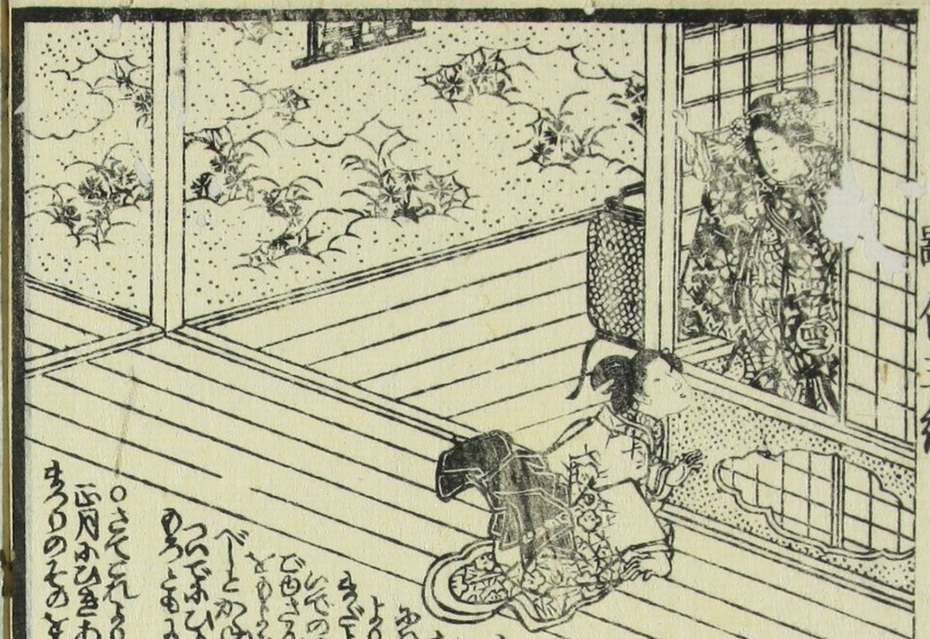
一筆庵主人

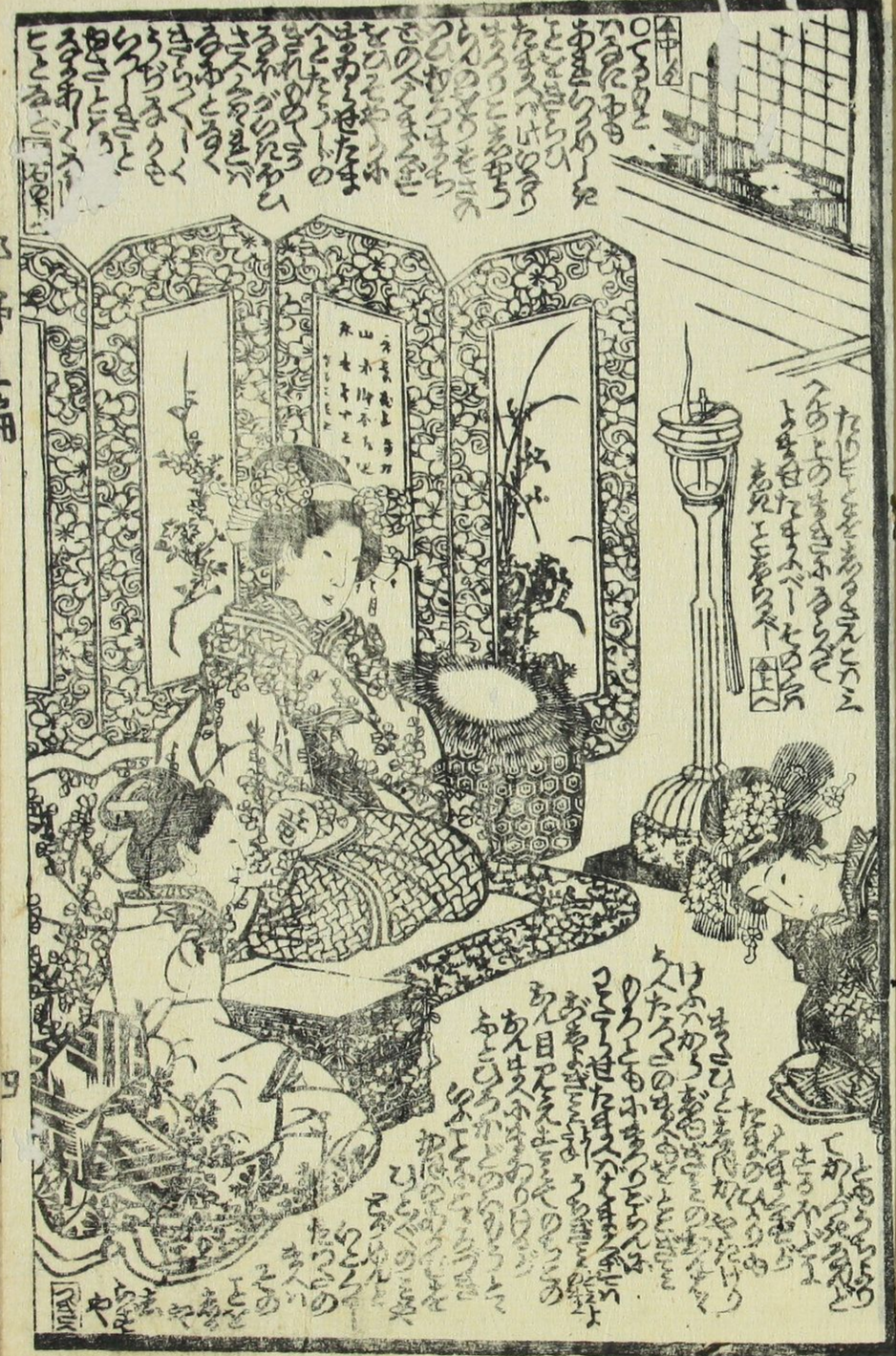


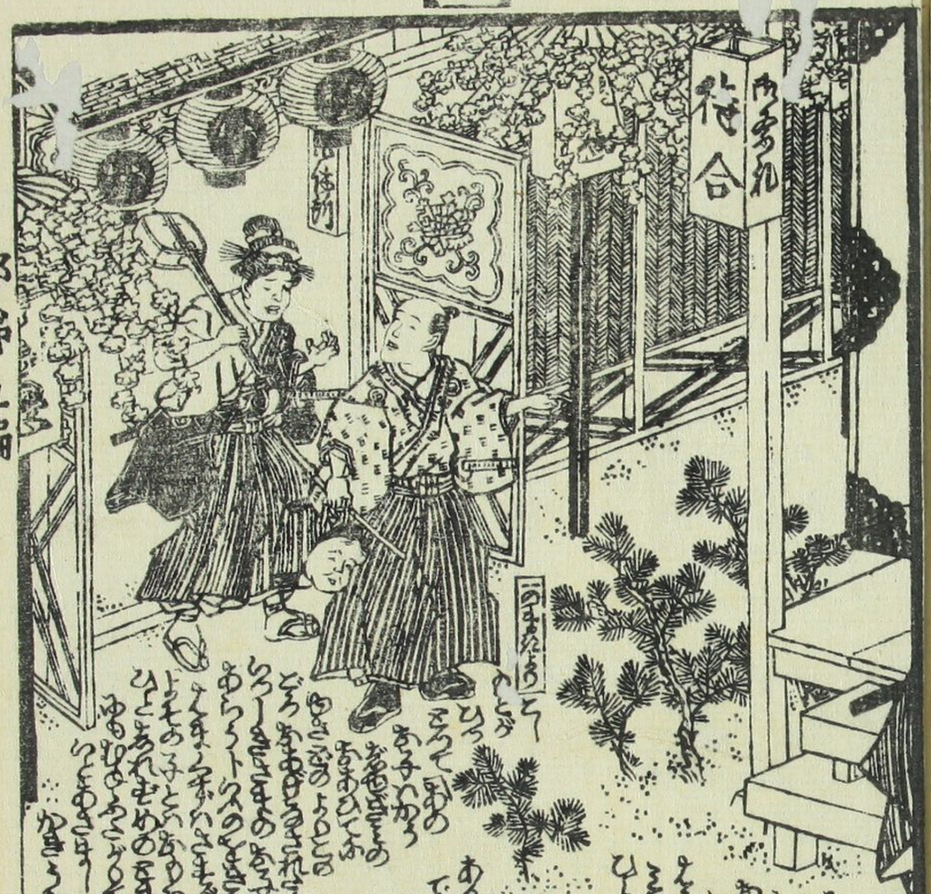
拾芥抄上云「和琴　宇多法師
寛平法皇皇子貞仁親王の御名あり云云」
と和琴これと　和琴いとことりふひく
ならうねさてあふりぬれひとふかへとり
云先師の作畢ぬり

うどの六條御所
浮舟そびの圖

ようつれ
和琴ふとや
いあくの
ありよひる
庭の
あき







のよまいまふたまわりつうりふうてうろぶるんどうくるてのひきうるれうるたやのびらくらるゆありのてのさうふうす山ぶきそのうえとめとてきとようつまきー女のもきあのらうあれあびのあやまんまうまぶりのひきゆやうりうりうりうりとこふえるやうりさいまのこちやうりかのこうもーものりけれがつのおんてものんをもひらきやまもらひどころうとまうくーひろえんかつうとさえそとうひろびてとれさーけれいをひまてとそこうふうひとあろまうまうきそめでけ心ふちぶあうとあるのされびわれんののつさあきあうあのもあるけんやうとやうまうそあそいうんもでぬさそもりかさーとうちうれいらくあひてあとびかてうとうのきうひくせうまきまし。るべーとうのひらぐのさうりまるいつわはのうろうのかふみーてあそれあくへのかふらうかをりうやーまさふさいそりぬとこのこえそれうきのふいうまはつりうりのともびけさもまきあのうさあぶうりのふらんとまさひされんくんへさうるとうのつまれれるんやまもうをまをのそれそれがひとまつぶそー

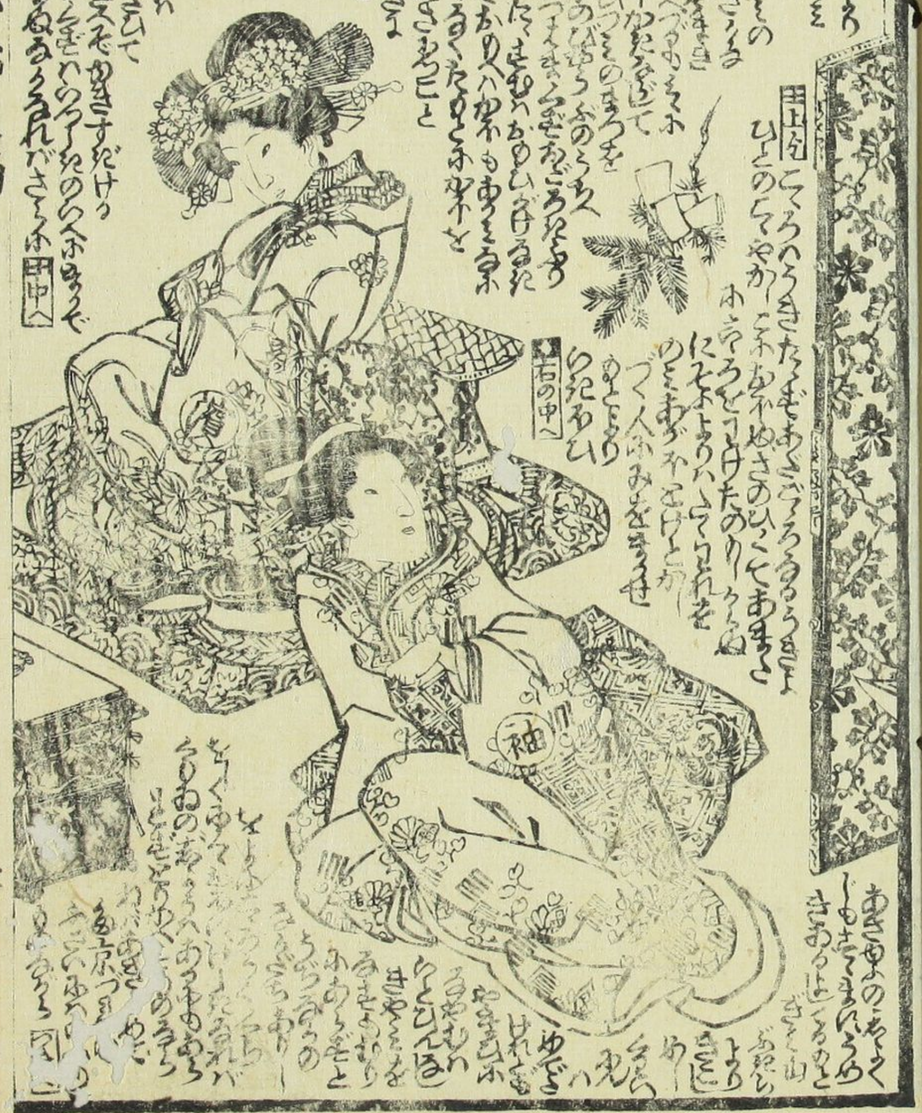
つぎへ

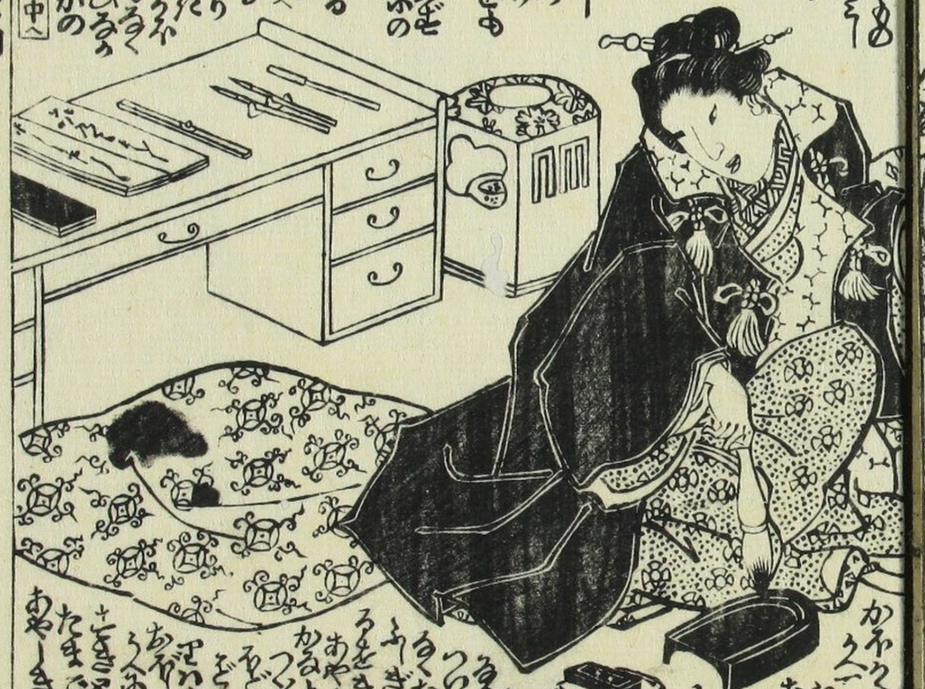
いあるる女どもへようとんありてこれかそれのころとのつぐさあうきたるあたかひれかりたるされきうさあれんさまへとんうるうちかふぶきさうたうぶこのあうーきうをひのそふうりれゆそんーうる

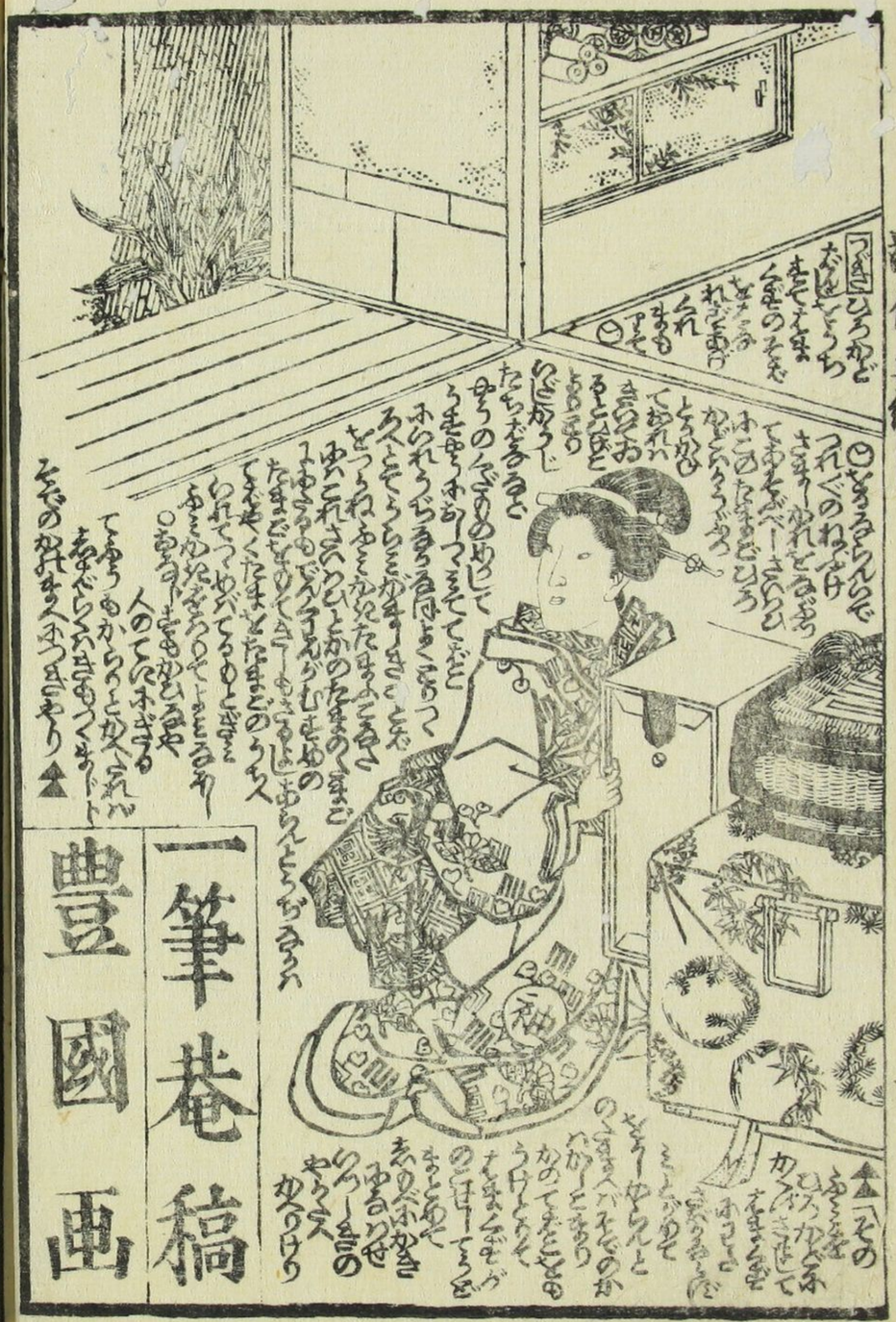
こーのそどうううくさもたぶおうとあれんさるこのころとのとまんうさうこひければかのおつくさやりおうまうさまのおまでことさうひさうハ糸さあーろちしまますこちらのうことあわそぬとひふをよそうまうこひとりの

二の本文へ

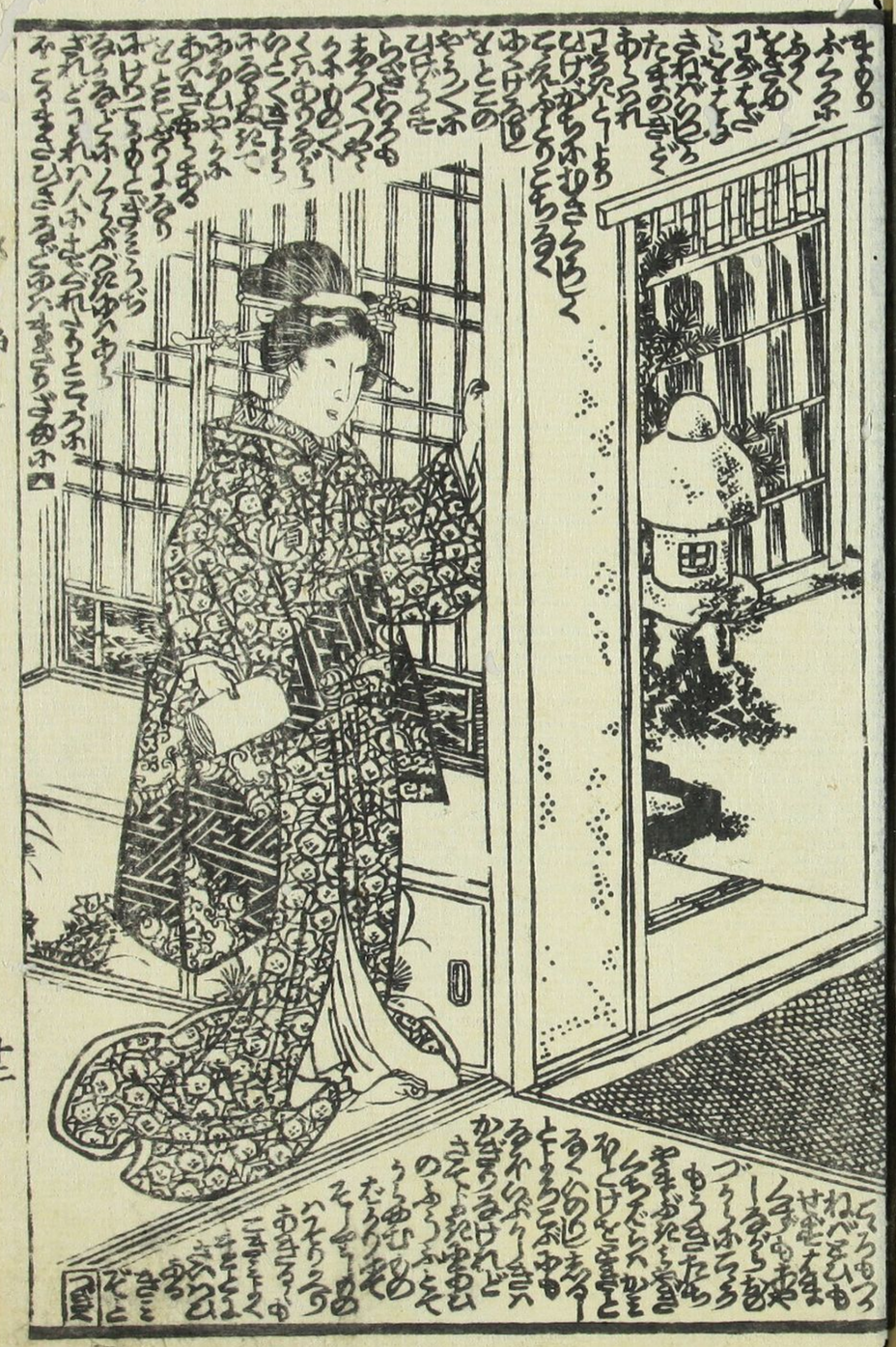
四

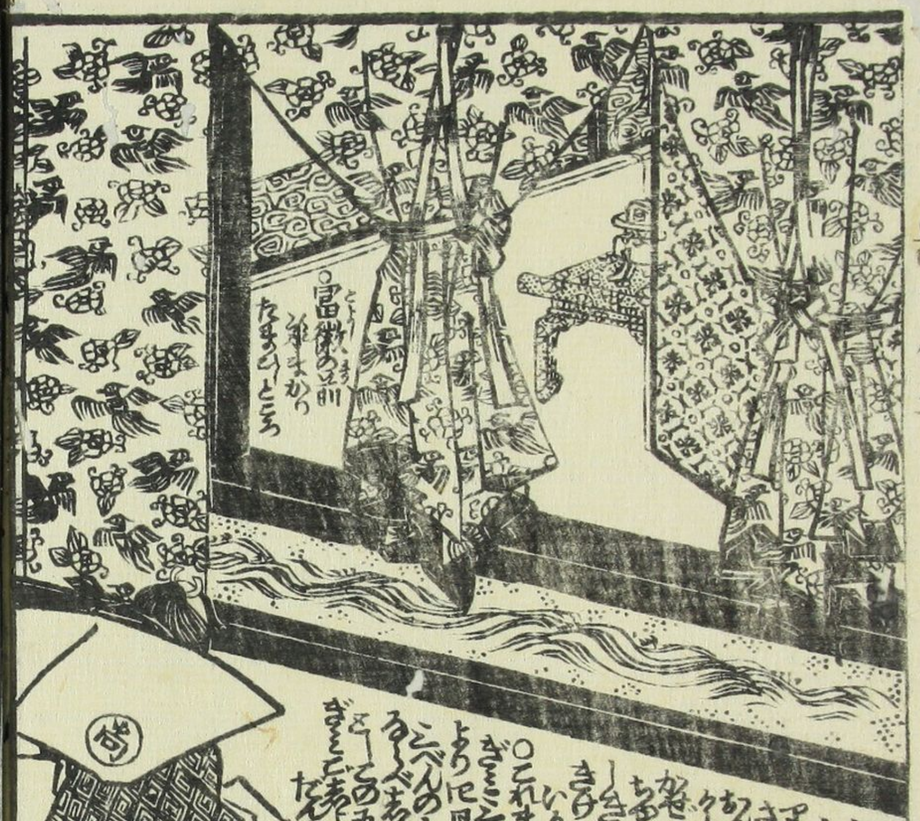

袖

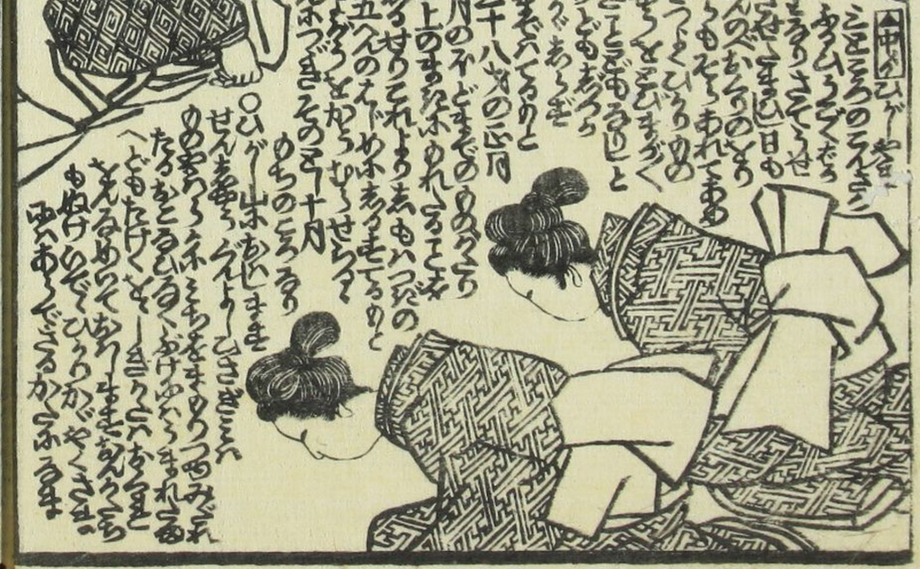




一筆画稿
豊国画







○中ノ巻ひげやさ
こところのろんさこ
あるいうぐだろ
まるりさそうせ
さぜ（まじ）日も
あんのべむりのまり
くうもそっれてまあ
かぜつくひろりめ
ちもうをこひまぐく
しきことごもるり」と
きびとごもあろう
いうぐあうぎ
○これまでへてるりと
ぎこ十八才の正月
よりに月のすどまでのりのうち
こべんの上のまうふれうてよ
るうべまるせりこれよう去もへつぐの
をーこの五へんのえでめまるまでるりと
ぎこごあよりうむうむうせらう
たふつぎこそのさ十月
○ひげ出まあしまを
せんまあう、ぐんりひさぎこん
ののあうふねこもうるくおけめいうまれるあ
たるをこうるくおけめいうまれるあ
へどもたけくそーきこくへあうまと
んるめのそあり出まちんうちも
ぬけのぐひうかべやくさふるま

○中ノ巻

つゞき

たれもとりあつかふものハ
そろそろとかたづけて
やくそくのごとくに
ようあらためて
大のあくまつくと
たちよろよろもゆげもせまじたゞ
さめざめとなくばかり
きうみのえぐふかゝへあぢはひ
かそんがやうぬ「ハ
多ハナア「ゴまつよさま
のたのせうみおもひでも
こゝろ「まつ」とふこもりろ
くろうれと「さうけんこれ
ねいまさめちやとらやく
「のうろふもあろ
まうさぬもあろ
まいろれどちく
きやうざいゆも
たゝまでうあそまろふ

左より

きやう
ざんの
かゝふろさ
まこゝろ
されまを
おろさ
さまふ
ろのまさ
おかく

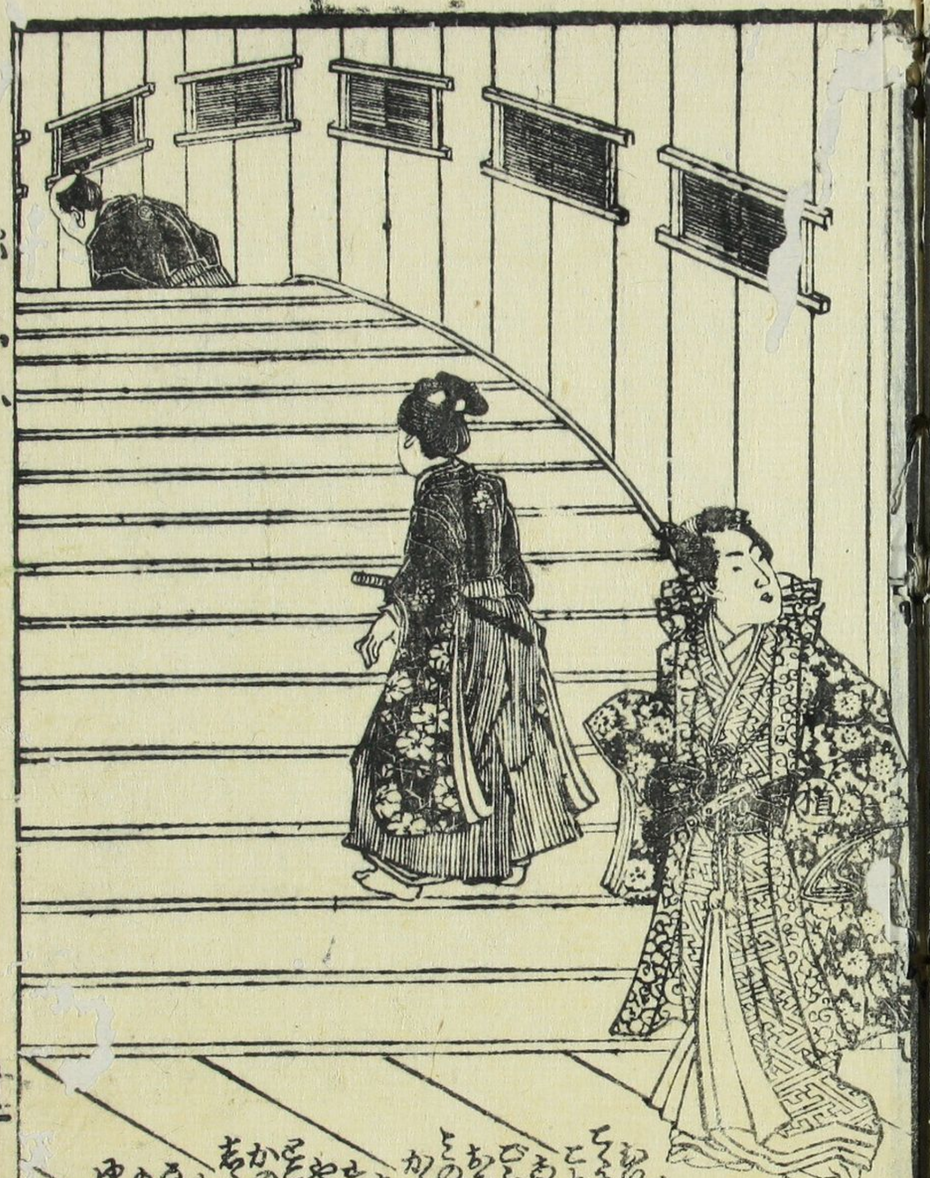
かたたのそかあ
ふあさごまつまた
まこれやくうあ
くろまうとまろそ
ろうつろあれ
ぬうくとさろうら
のつごろうろ
みとぶまろうのことで
きろせそんれるのご
かゞぐの◇

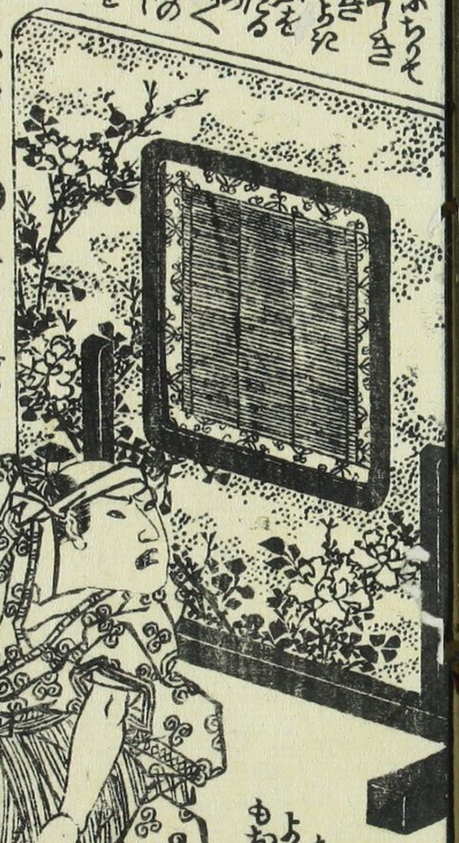
◇ふてがやくそくのうこそろぶかつるかトうそうもまのれハやくうそ
ひとをまをふてまうのおよちまぎ
「あれせのおよちまぎ
うしくゝへこそごてーをごふんかつて

右へ

あろさあゆもごたぐんを
あとおさあごはんぐを
ろさろくろうべ「ハもく
かろうそそのの
てとおおかのの
きんちまうとかん
ーゆさろう
くそくのえ
ちまうくと
うちければ
「さうが
おくく色
まうーー
ふせうろ
まうそを
まうてん
みうけれ
どもこさて
ハつをを
ろうろう
のろうまぎんろゆ
ひとろちそそのろハ

つゞく





豊國一筆莽稿

勿賣交庫

其姿百鹿面影

一筆庵主人稿

一陽斎豊国画

八人金魚

年毎ゝ新刻する稗史ぞ江戸産物の第一なれ。浅草海苔ゝ拂底でも。新版ものゝ夥ゝ出れば売ると声高く賣るゞ都會。當りものゝごとく魁て其面影を寫さ見ん。お山の大将ゝとふわらぢ品の能のゞ當世と聊時好ゝ協ひ。そこ彼所もがりぐ爰も減ぐ勝手ゆるみまする齊く漫ゝ仕入を惜むゞ故蒔ぬ種ゝ生ぬ理り。仕て異とそもせね中ゝ真似をされるも又大慶今年ゝ取り病み羅り。懶ることゝ他ゝ後れ秋の季うゝ夜るべをうみて。稿を終ても重ユも舩込ゞつ賣物ゝするごとうと書價ゞ歎息もうるゝむ。初手うゝ天窓被割扱そ。配ひゞて扱揃ひ。そこゝひふ雙ひ一画師扱元ゞ廻一早き発兌を祝して自叙もとらん

嘉永二己酉季秋稿成
同　三庚戌孟春発兌

一筆菴主人誌

足利義尚卿の
おとゝ
妾於三の方

あさぢふの
つゆ
袖
あらく
ものの
すゝわ

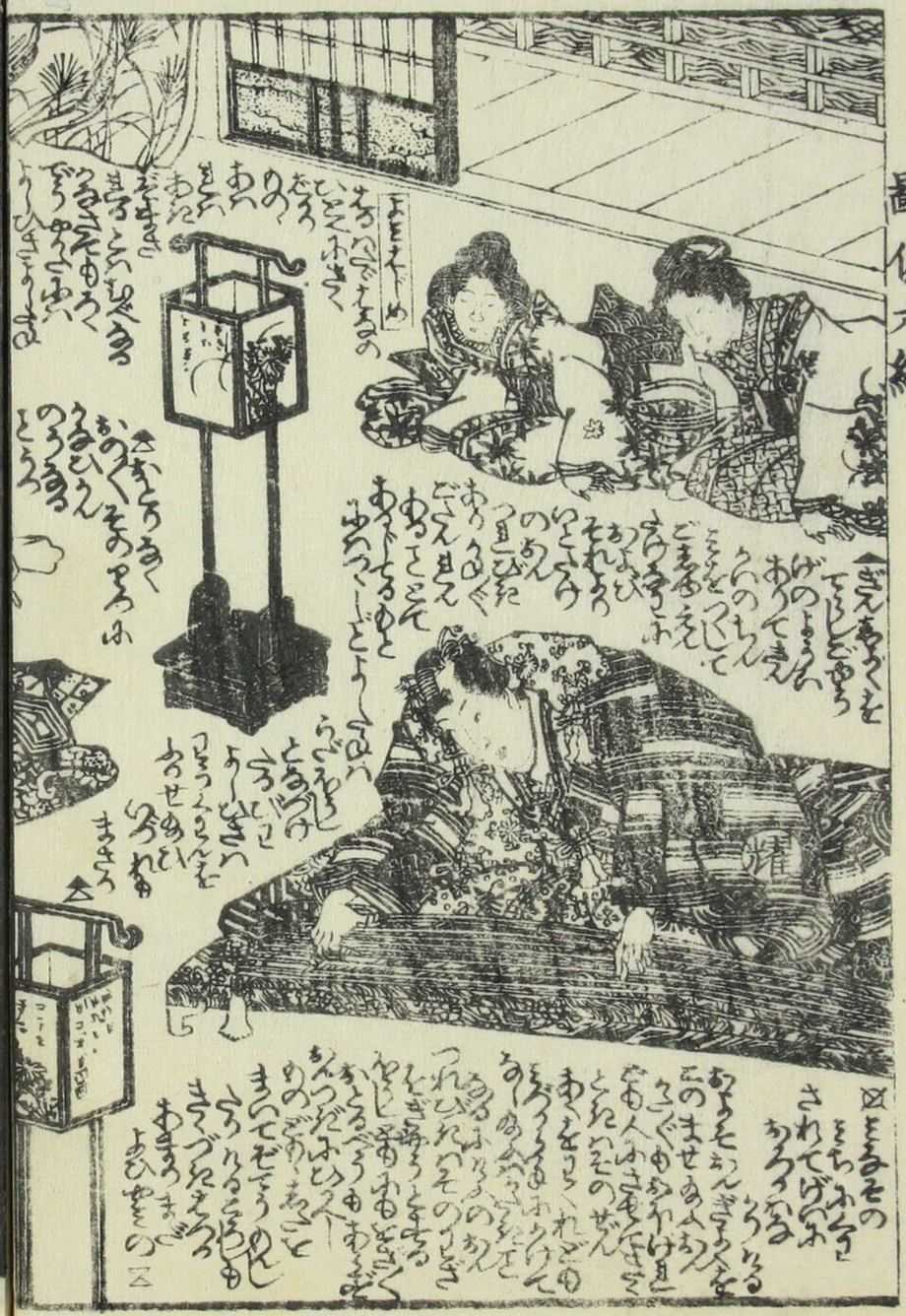
赤松柏之助
あかまつかしはのすけ
保行

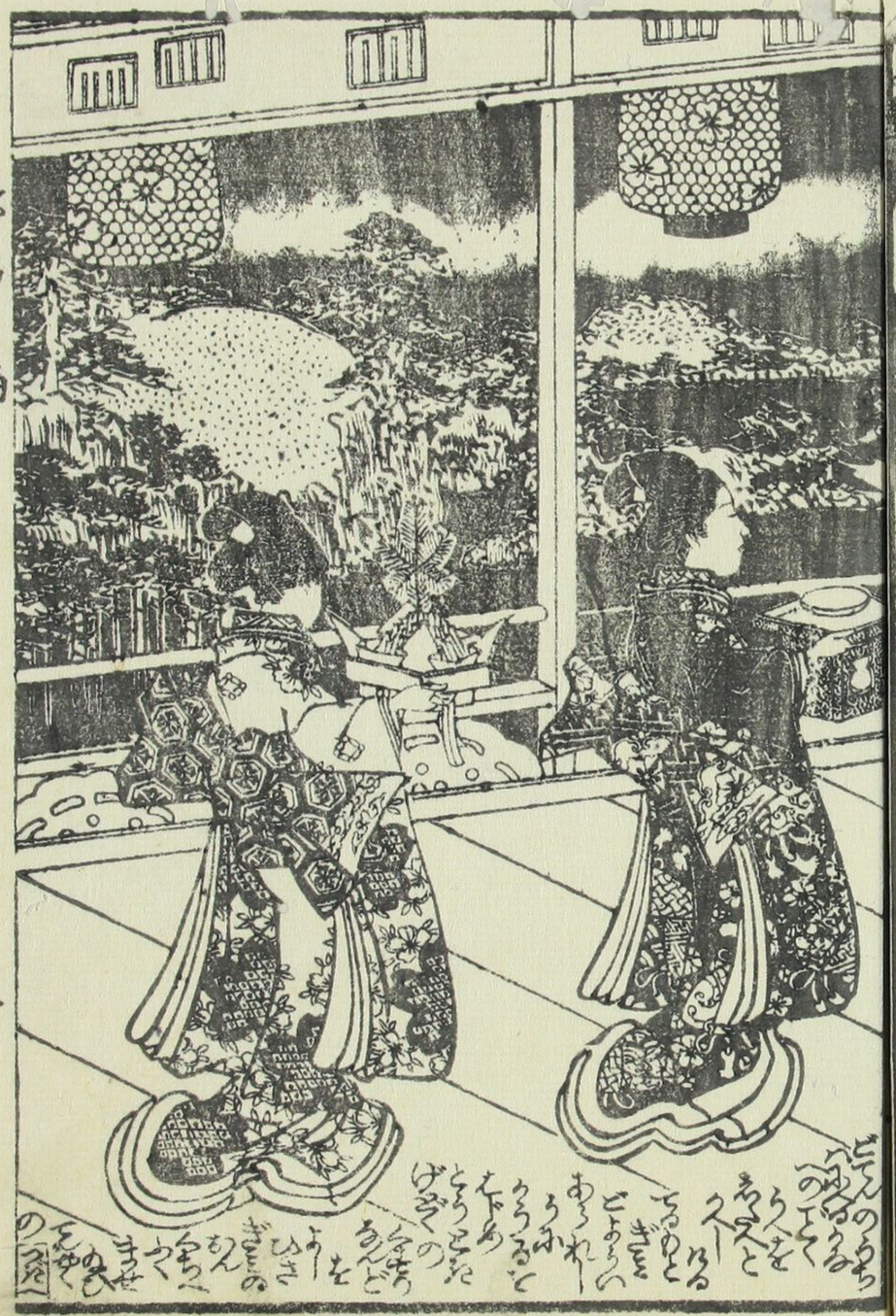
足利耀基公
四拾歳の
賀宴ヲ
依て
壽像ヲ
刻ませむ

面打の名人
入目一満

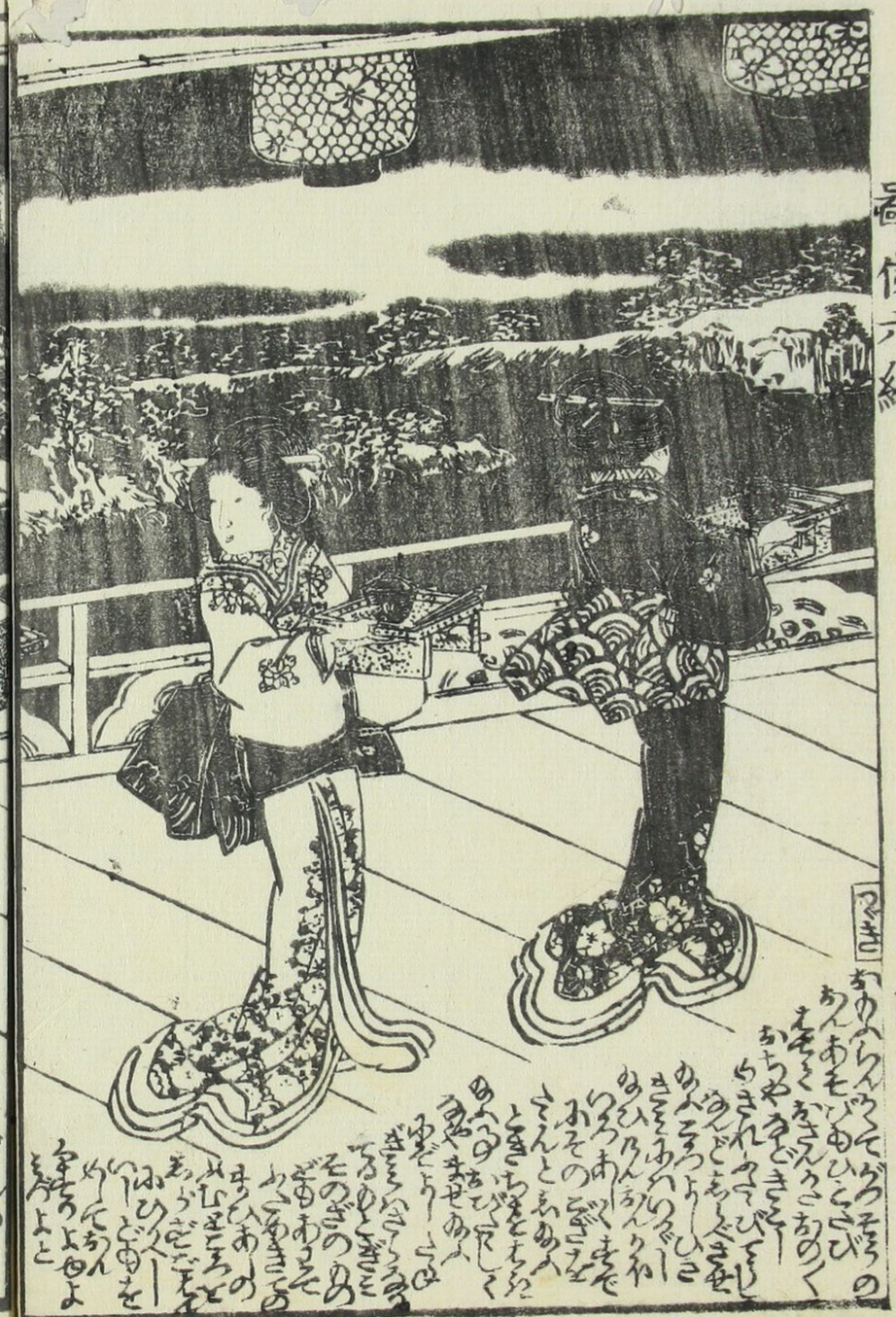
柳営ニ
牧ヲ
さつ名
てらす
月ヲ
香風
はこぶ
みだれ
せず

足利耀基卿

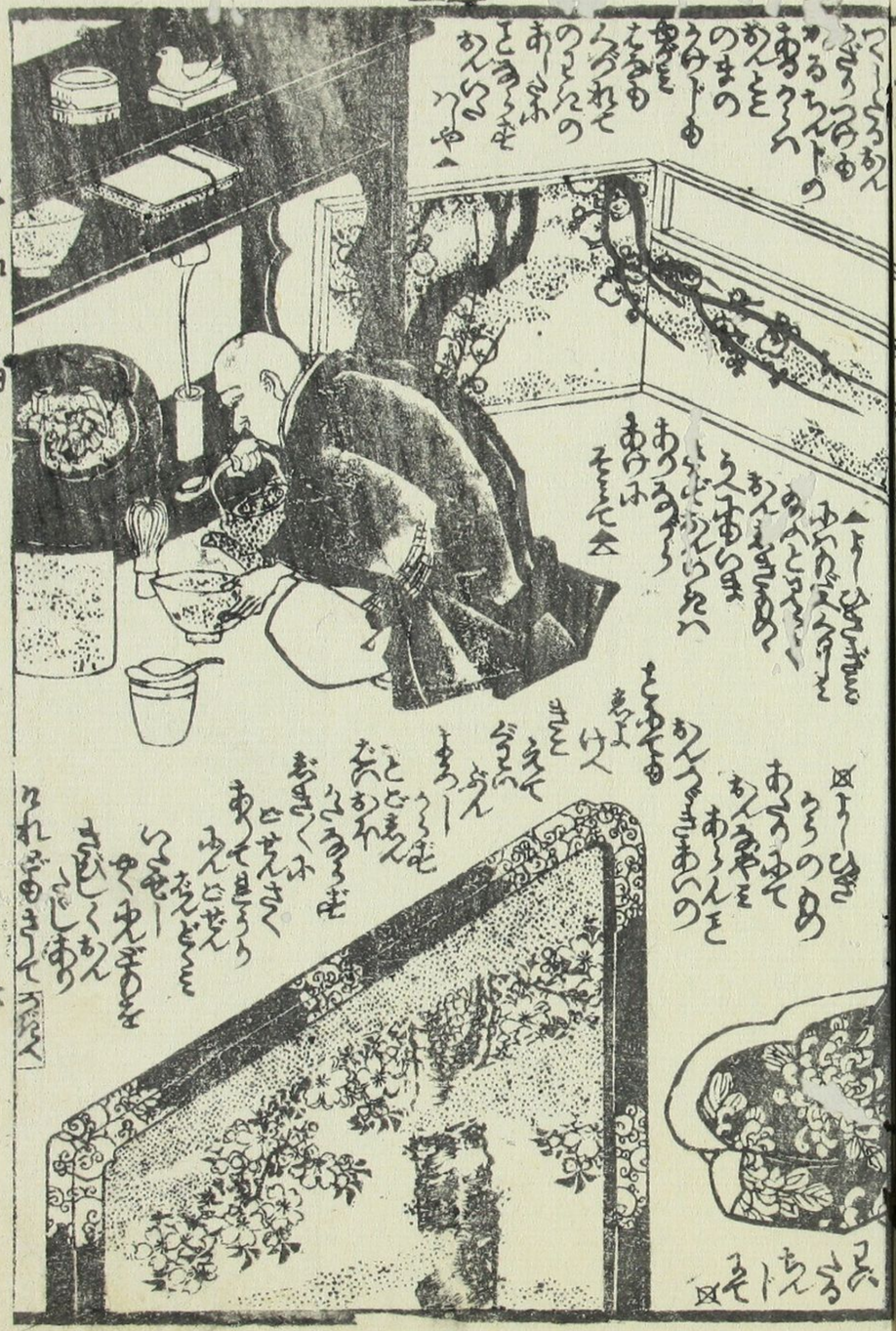


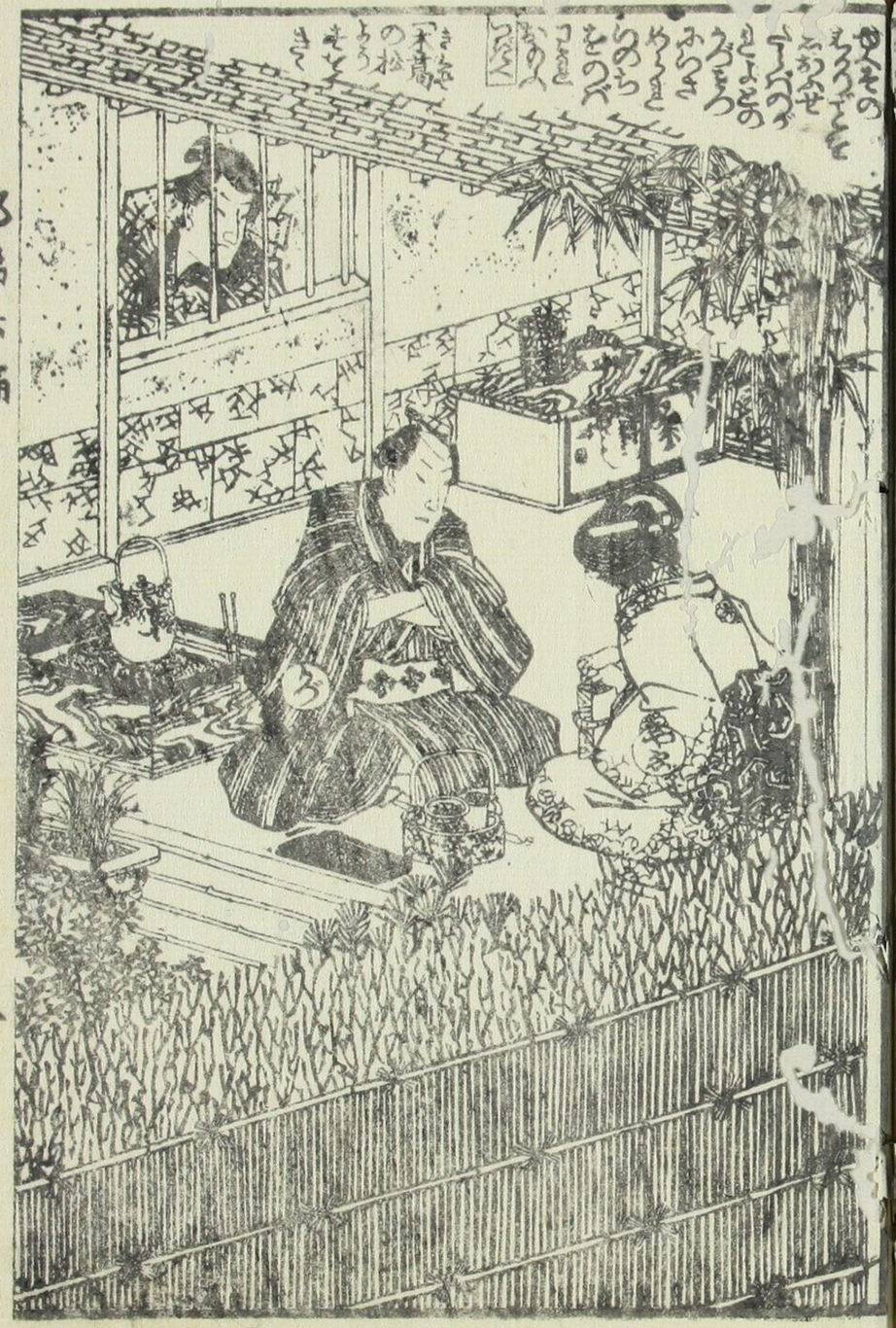


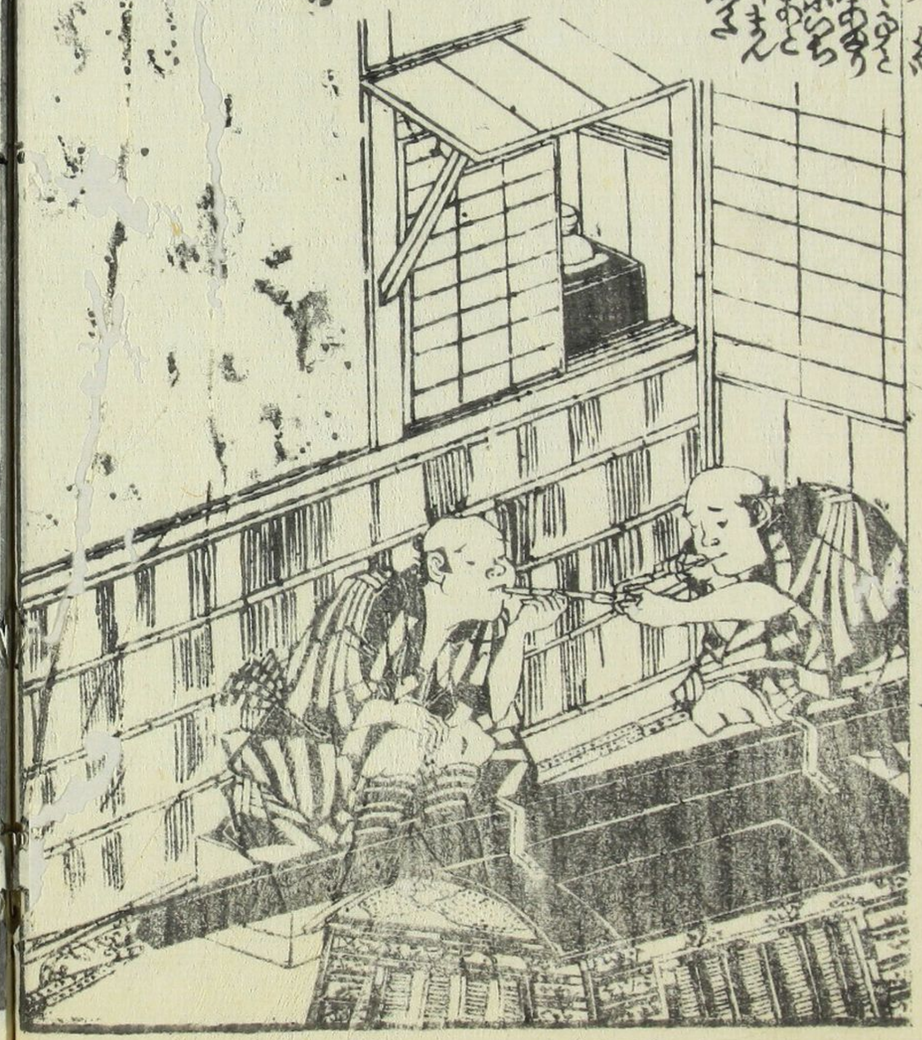
どてんのうちのうるのてくうをきるとスーるるとぎをどよのあれーうふうるとちよりとうこたげぐのをうちどをようさぎのもんちくまぜもの「ふ」

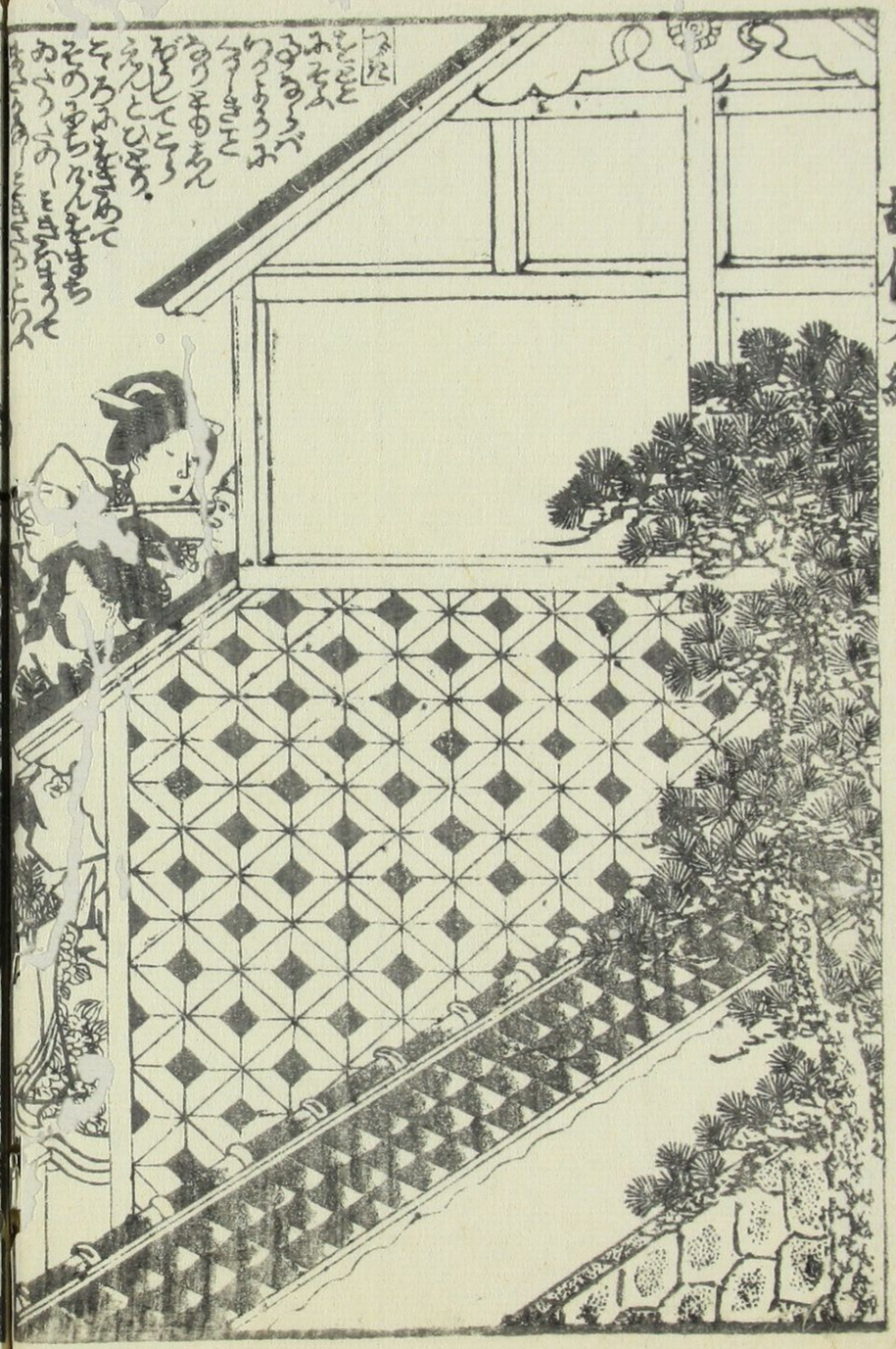


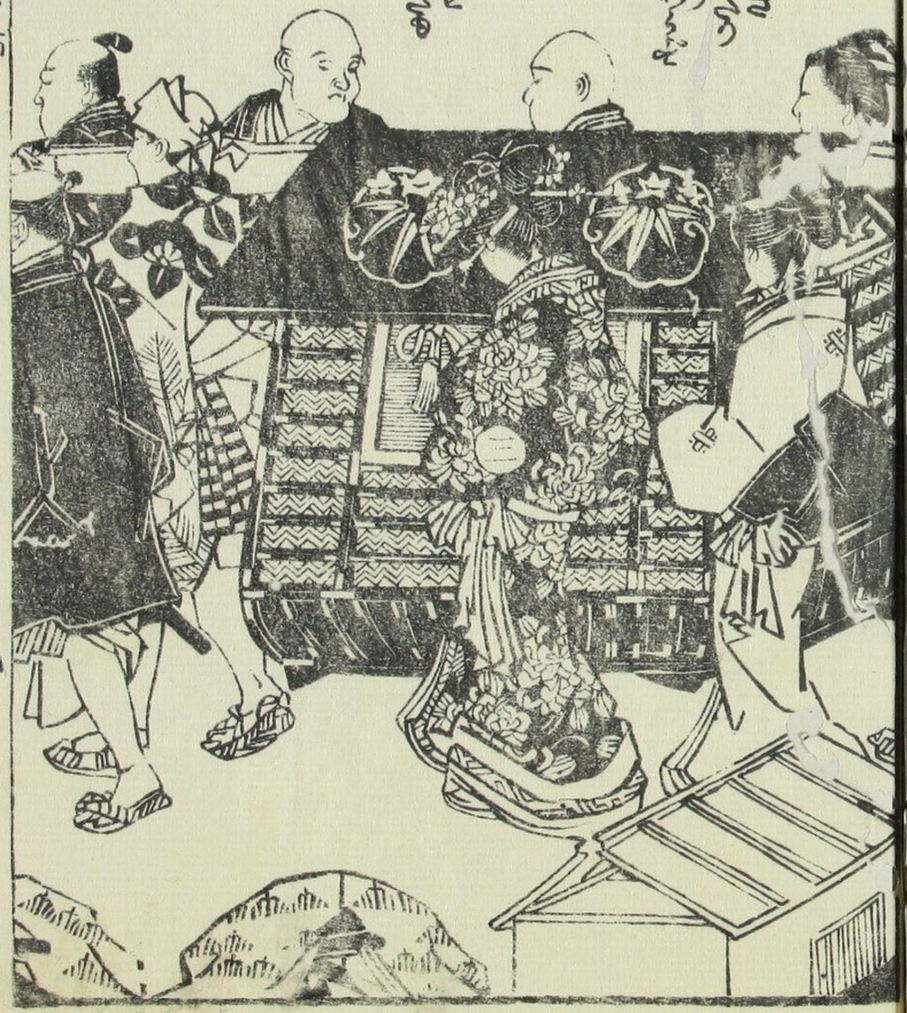
「ふき」おゆらんうてそろうのあんおそびもひこさびまそくおさんうさおのくおちやをどきこてりされーさびてしほんどもうぐさをのんそうよしひさきこゆれいうぐなひろんろんうれうろおくまそおそのぐぎこさんとものんときちをもろたのんうてしてふやまぜのんゆどうーうびぎこうさうるひこきこそのぎのめぐもおうこそおこあきこまひさころとあのみひさころとおうぐぎこさふひんどをりんてちんよもよと











つぶね
そうしてあるうちに
まあ
ようこそ
せわしう
きましたと
ひとことあいさつをきくとすぐに
ひめをひっきんにむこうをえんあいふそうさんどまわりのいもをみそうつきのさあふるふうふうひめとをりをまつ

このうちを六ぢうむろまちのやまうじ
まつ久

まつをのまんぐわうろんそせんまいくるとそろとひあそそざうりみるうそおさんのふうふうのそ
おおうめみあーあのせとるるふいぐあうろんもろろれぞとふいみべきみるろねつぶね

豊國畫一筆菴稿

錦昇堂藏板略目録

其由縁鄙俤　十四編　笠亭仙果著作
十勇士尼子の礎　三編　爲永春水作
雨夜鐘四谷雑談　五編　河竹其水作
　六編　歌川國貞画
十五編
十六編　梅蝶樓國貞画

比奈乃都大内譚　初編　笠亭仙果作
　二編　一勇齋國芳画

地本繪草紙問屋　江戸ちりふり町　恵比壽屋庄七板

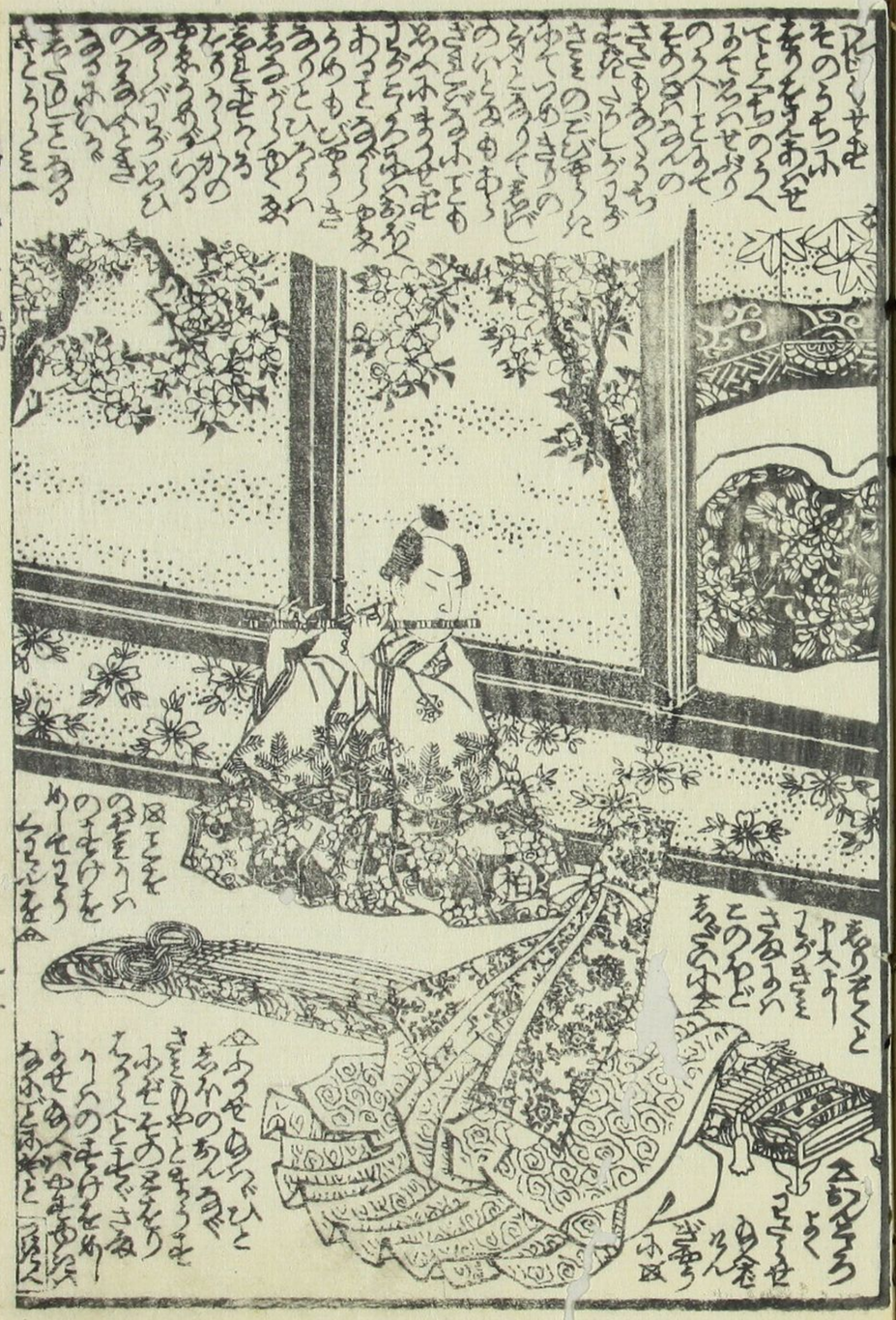
一筆唐橋

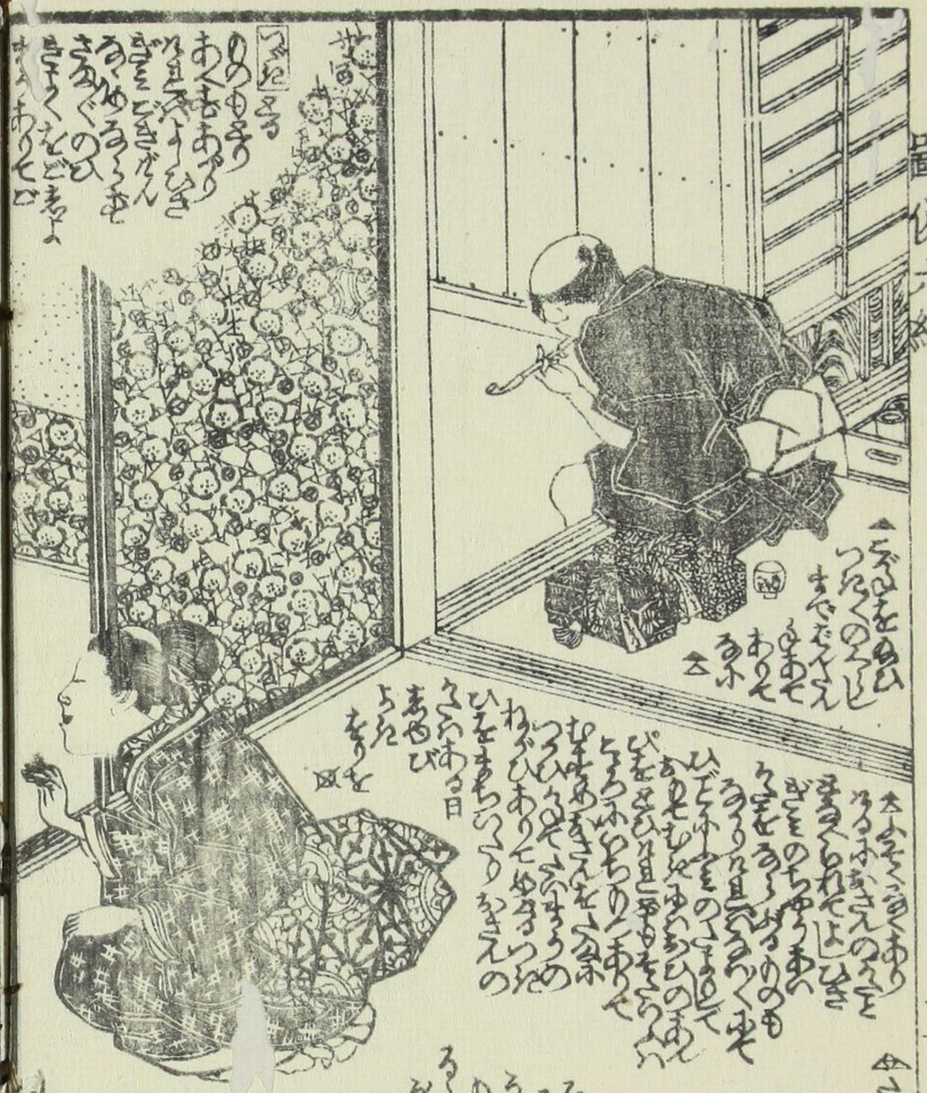
豊国画

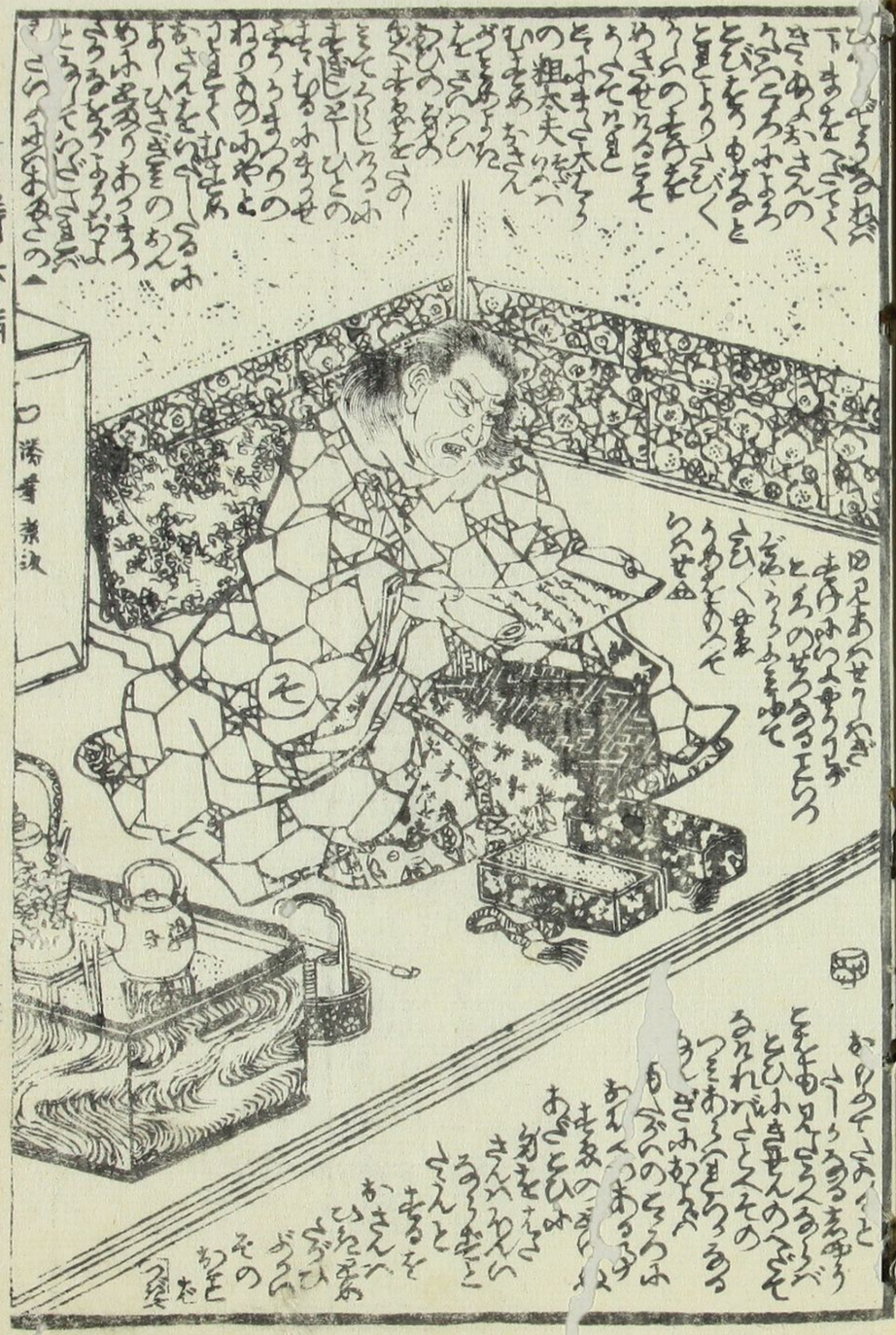
真葉の山人金成刻

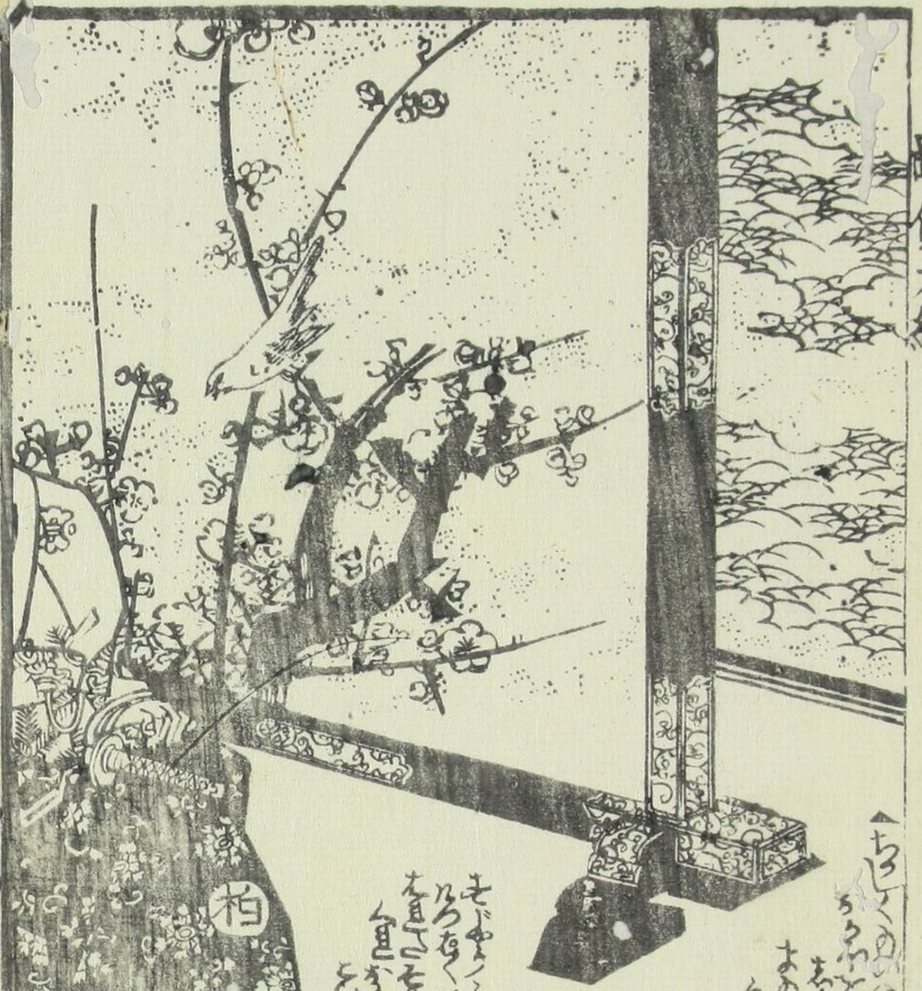
副面影

第六編



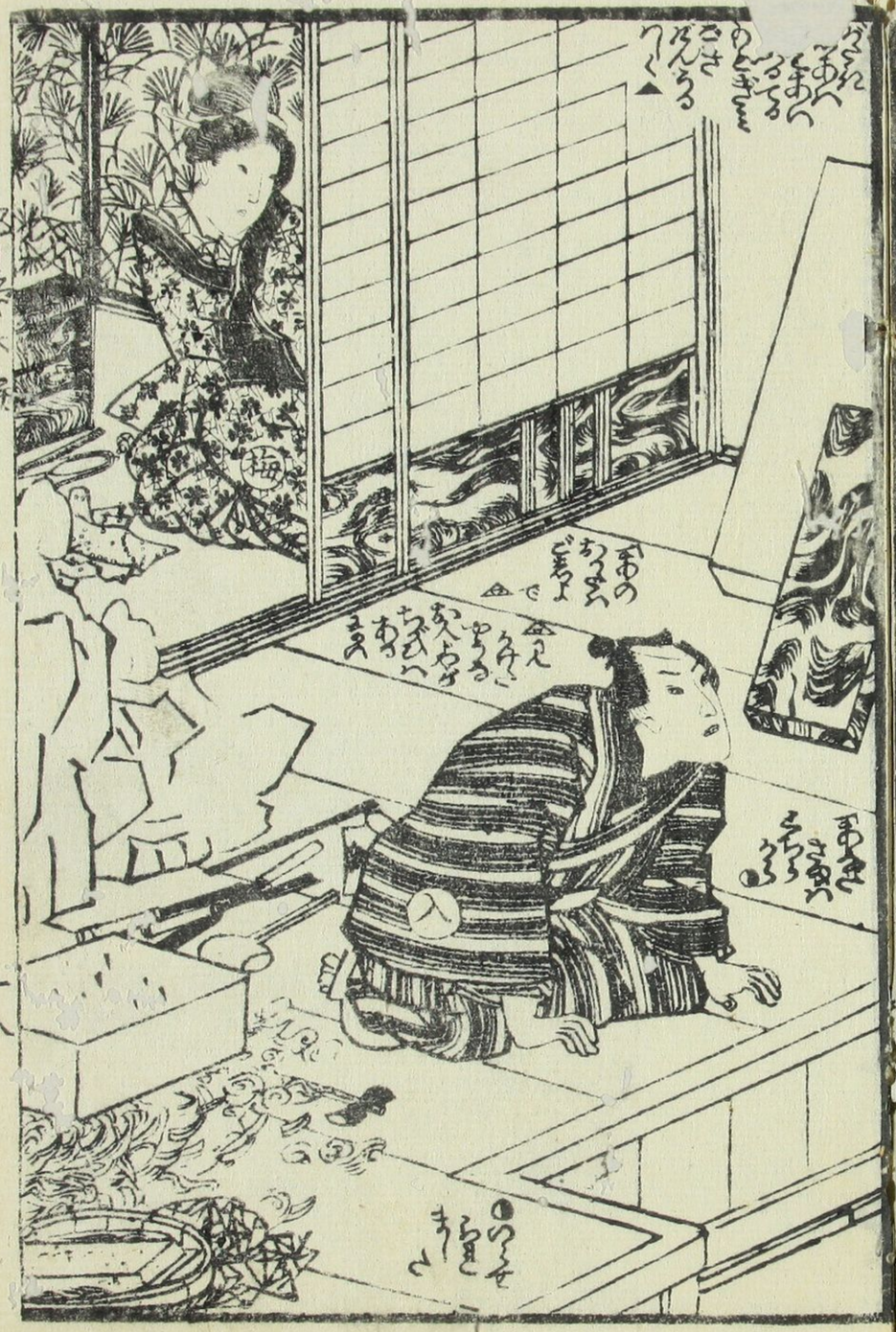


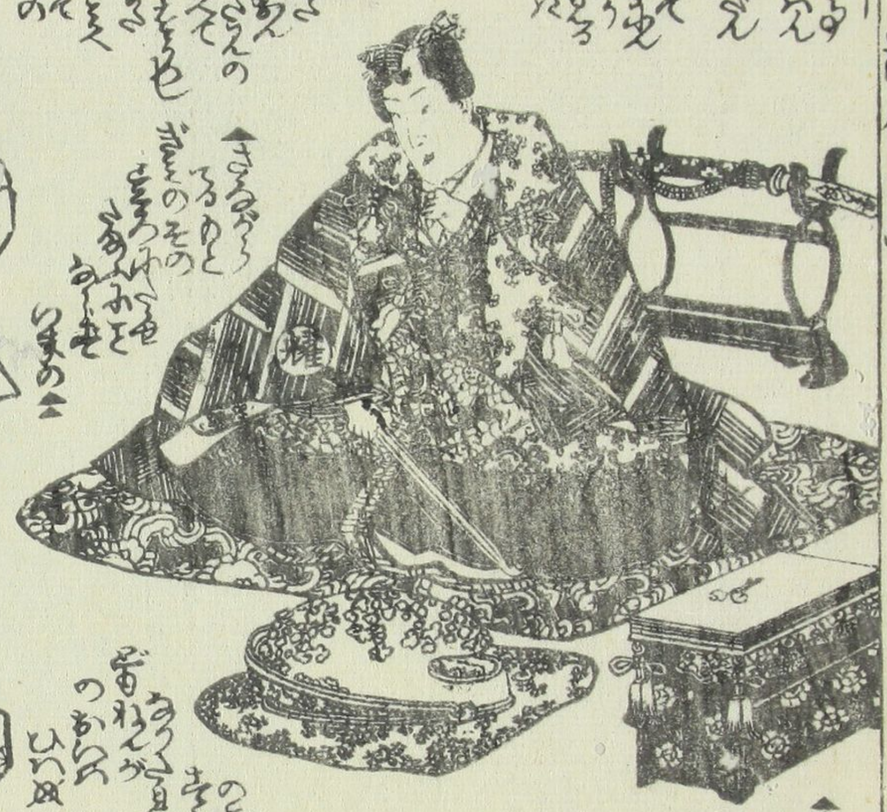


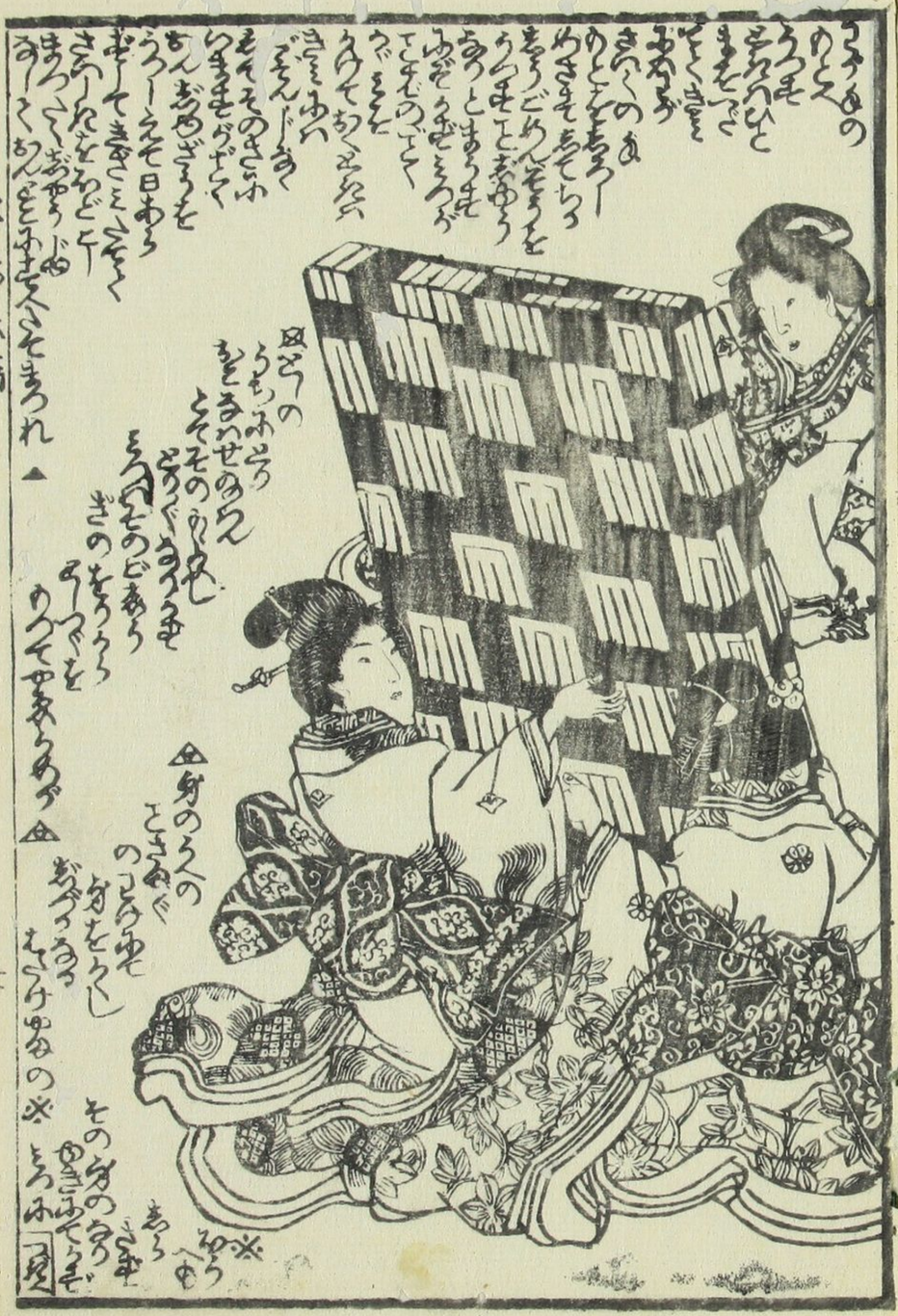


柏

三







一筆菴稿

一陽齋豊國画

樂亭西馬作　六編

稻妻形怪鼠摽子

一勇齋國芳画　七編

比翼仕立二個傘

笠亭仙果作　四編

一寿斎國安画　五編

安政五年戊午孟春新刻

壽笑亭笑壽作　五編

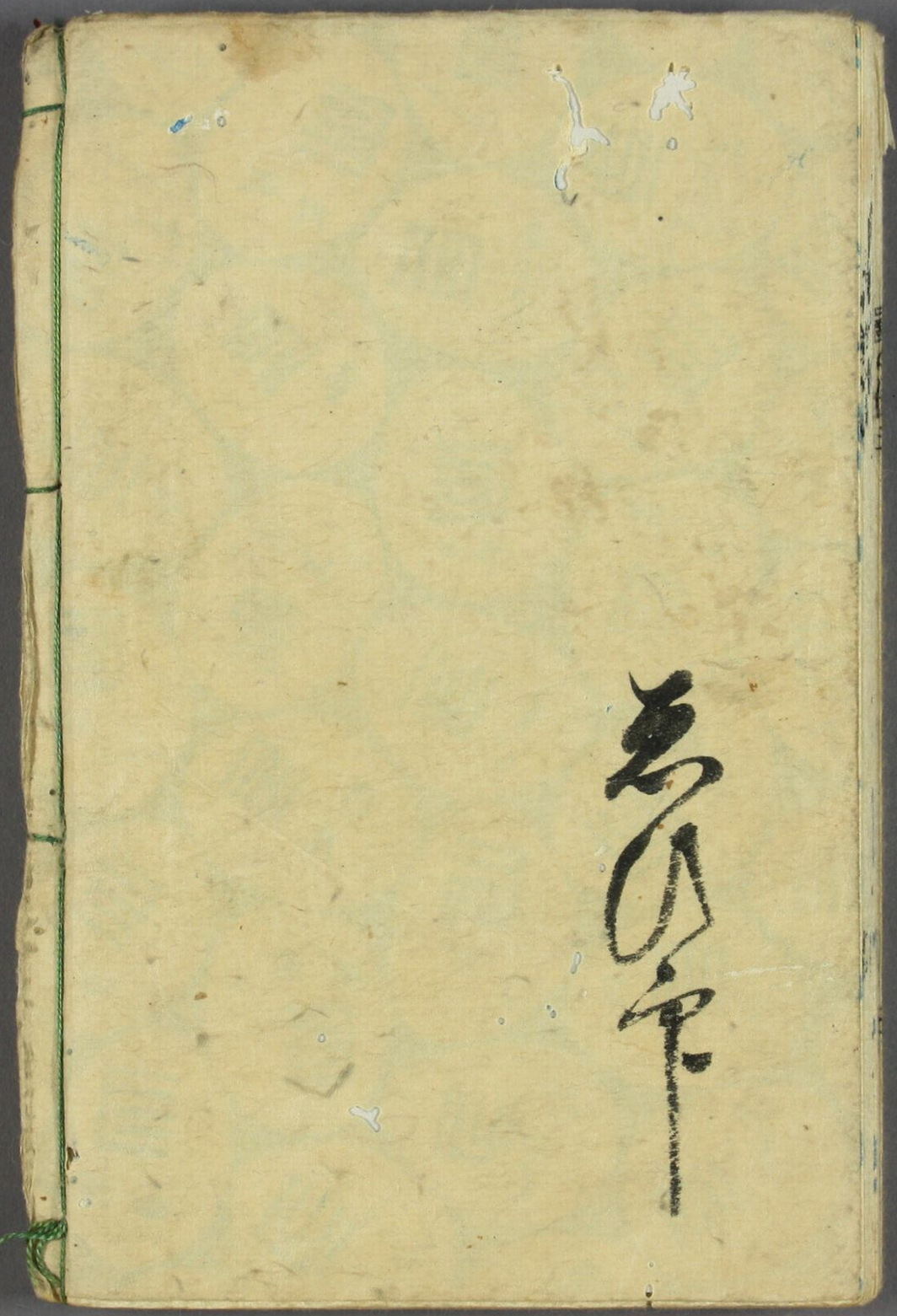
與謝武郎戀夜話

一壽齋國貞画　六編

菊紅葉

國貞画

字津谷峠

種清錄　全三編續切

錦昇堂　そびえや町　そびえやえん